

・たつ雁や□くと声をつく 京 橘栄（『くさ摘』文化11）

・空蟬の寒さ見よとや木の葉降 京 橘栄（道のともし）文化12）

・爪音もつれぐならん春の雨 京 橘栄（『くさ摘』文化14）

〔参考文献〕

綿屋文庫連歌俳諧目録・松宇文庫目録・柿衛文庫目録・俳籤譜・続俳籤譜・中島文庫目録・志田文庫目録

〔刊記〕

御幸町錦小路上

京都書林 桃林堂勝田喜右衛門

橘栄堂勝田善助

『くさ摘』（文化4）

烏丸下立賣上

平出書林橋栄堂

勝田善助

『花の兄』（文化4）

烏丸下立賣上

京都書林 橘栄堂勝田善助

『春のもの』（文化5）

烏丸下立賣上

書林 勝田善助

『くさ摘』（文化10）

芭蕉堂書林

烏丸下立賣上

勝田善助

『花供養』（文化9）

杉の葉赤赤とあけ柳の
 白梅乃下すてくくよ新朗
 瑞雲やありくく流世若
 柳も好まざるぬ田舎式
 くれくれの柳をきく啼とあ
 梅咲やる乃あくこの芝築地
 春柳より引けそある小水
 下野の箱とさくりまのれ
 折竹と好さるくよりまの月

柳赤 二六
 尺艾 三六
 本今朝 四七
 蕉老 四七
 長崎 四七
 京 四七
 橋栄 四七
 芙蓉 百佳更
 宋也
 蒼虬

橋栄堂の句
『くさ摘』（文化6）より

出版点数は六六點あがる事が出来たが、このほかにもあるかも知れない。寛政六年の『雁風呂』が最初に出版された俳書であるが、寛政十年には、四點、文化元年には六點、と点数が増える。文化年間は年によって増減はあるものの、多い年で七點、少ない年では、二一點である。ただ、俳諧摺物などの一枚物を出していた事などを考えると、点数が少ない年がその活動が低調であったとは言えない。

文政に入ってから、ほぼ毎年一點を数えるのみで、確かにその活動が低調になったと言える。文政十二年の『ななもしき』でその出版活動を終えるが、それまで文政五年から十一年までは、出版されたものを確認することは出来なかった。

『花供養』の出版

『花供養』は天明六年に、京の東山に芭蕉堂を創立した闍更が、年々三月十二日に、花供養を行い、それを記念して刊行された。天明六年から『花供養』の出版元は、菊舎太兵衛であったが、寛政八、九年は「芭蕉藏板」とあって、出版元が定かではない。寛政十一年には、勝田喜右衛門と勝田善助との相版となっている。この後、勝田善助単独となり、文化九年まで続く。その間、出版されなかった年もあるが、十年間は、勝田善助がこの全国規模の年間撰集の出版に関わったことは、特記すべきことであった。この間の芭蕉堂は蒼虬であった。

金沢の俳書の出版

勝田善助は、金沢の俳書を多く出している。特に、文化年間に活躍した暮柳舎車大の編集した俳書を多く出している。車大の年間春帖『くさ摘』を毎年出版していたし、ほかに金沢の圃辛亭甘谷の年間春帖『苗し

ろ』や趙翠台眉山の春帖『花の兄』も出していた。『花供養』の出版元であり、金沢出身の芭蕉堂蒼虬と関係が深かったことが、金沢の俳人と関係にも及んだ事なのであろうか。ともかく右にあげた勝田善助の出版点数六六點のうち、二一點にのぼり、ほぼ三分の一が金沢の俳書であった。

俳人橘栄堂

俳人として橘栄堂の句は、『花供養』に多く載っている。恐らく芭蕉堂蒼虬の門人ではなかったかと推測される。また先にあげた金沢の俳人の俳書には必ず載っているのも注目される。ここでも勝田善助と金沢と深い関係が窺われるのである。諸俳書より橘栄堂の句をあげてみる。

- ・やまさくらもときしみちをわすれけり 洛 橘栄（『花供養』享和3）
- ・散花に道は分からぬよし野山 洛 橘栄（『花供養』文化2）
- ・人声や霞の中の山さくら 京 橘栄（『花供養』文化3）
- ・かげろふの草に声あり夜の殿 京 橘栄（『くさ摘』文化4）
- ・花のかげに我も飯くふひとりかな 京 橘栄（『花供養』文化4）
- ・梅か香に田雀さへ古くなりけり 橘栄堂（『春のもの』文化5）
- ・筭に桜ちらすな小傾城 洛 橘栄（『花供養』文化6）
- ・梅咲や雨のあしたの芝築地 京 橘栄（『くさ摘』文化6）
- ・松の葉のかさなる物よ春の雨 橘栄堂（『春のもの』文化6）
- ・蝶の飛ほどにのびたる野草かな 橘栄（『くさ摘』文化9）
- ・きく咲や折事ならぬ菊ばかり 京 橘栄（『見果ぬちり』文化10）
- ・春の夜の仇に更行灯かな 京 橘栄（『くさ摘』文化10）

文化八年

- 『四時のつき』『四時のかせ』中二冊 車大編 石叢序 勝田善助
- 『はまちとり』半一冊 幸庵竹斎編 楮店竹雄序 圭雨跋 京都勝田

善助

文化九年

- 『花供養』半一冊 蒼虬編 芙九序 篤老跋 京都勝田善助
- 『松蔭集』半一冊 鳥翠編 霞外校 松崔霞外序 京都勝田善助

文化十年

- 『くさ摘』半一冊 車大編 京都勝田善助
- 『春事帖』半一冊 眉山編 勝田善助
- 『見果ぬちり』半一冊 紫石編 自序 勝田善助
- 『常盤樹』半一冊 茂良編 武西厓序 京都勝田善助
- 『浪速帖』半一冊 鍛月編 京都勝田善助
- 『龍門會』半一冊 關叟編 秉心堂履視跋 京都勝田善助

文化十一年

- 『くさ摘』半一冊 車大編 京都勝田善助
- 『木公集』半一冊 松隣編 樗堂序 三津人序 篤老跋 京都勝田善助

助

- 『さ々なみ集』半一冊 叡美編 松亭蟹州序 揆道人瓜坊跋 京都勝田善助

田善助

- 『養老の秋』半一冊 起石編 京 勝田善助

文化十二年

- 『くさ摘』半一冊 車大編 京都勝田善助

- 『道のともし』半一冊 車大編 芸台樵夫序 自跋 京都勝田善助

- 『安伎乃曾羅』半一冊 鷺橋編 松亭蟹州序 如風跋 京都勝田善助

- 『哥仙墳』半一冊 鷺橋編 松亭蟹州序 如風跋 京都勝田善助

- 『百家交筆 おくの細道』半二冊 芭蕉編 三津人編 京都勝田善助

- 『伊勢文庫』半一冊 万堂編 自序 俳諧書林 京烏丸下立売上ル

勝田善助

文化十四年

- 『くさ摘』半一冊 車大編 京都勝田善助

- 『無量品』半一冊 青々所卓池編 自序曙菴秋峯跋 京都勝田善助

文化十五年(文政元年)

- 『たかむしろ』半一冊 青々所卓池編 自序曙菴秋峯跋 京都勝田善助

- 『嚴島奉納集二編』半一冊 篤老園編 自序 俳諧書林 京烏丸下立

売上ル 勝田善助

文政二年

- 『瀑禪定』半一冊 青蘆菴野渡編 京都勝田善助

文政三年

- 『され翁』半一冊 五彩堂桐栖編 九梁序 祐之跋 京都勝田善助

文政四年

- 『万家人名録拾遺』大二冊 放雀園長齋編 咏涼亭松子 二清園呉山 校 呉山等画 月居序 多代女序 京都勝田橋栄

堂

文政十二年

- 『ななしもき』半一冊 眉山編 自序 京 勝田善助

- 仮題『眉山春帖』半一冊 眉山編 勝田善助（『加能俳諧史』）
文化元年
- 『蠅はらひ』半一冊 魚心等編 寶晋堂呉山序 京都橘栄堂勝田善助
外一軒
- 『花供養』半一冊 蒼虬編 執古堂葦笠序 京都橘栄堂勝田善助・桃
林堂勝田喜右衛門
- 『くさ摘』半一冊 車大編 勝田善助・勝田喜右衛門
- 『苗しろ』半一冊 甘谷編 白狐序 勝田喜右衛門・勝田善助
- 『釣竿』半一冊 圃丈編 自序 京都橘栄堂
- 『続柞原集』半一冊 馬仏編 勝田喜右衛門・勝田善助
文化二年
- 『苗しろ』半一冊 甘谷編 蘭阜序 勝田喜右衛門・勝田善助
- 『ましり咲』中一冊 車大編 挙遠序 蒼虬跋 勝田喜右衛門・勝田
善助
- 『花供養』半一冊 蒼虬編 白鷗居千賀雄序 京都勝田善助・勝田喜
右衛門
- 『南無秋の夜』草丸編 源正房跋 京 桃林堂勝田喜右衛門・橘栄堂
勝田善助
- 文化三年
- 『くさ摘』半一冊 車大編 勝田善助
- 『花供養』半一冊 蒼虬編 志字序 京都橘栄堂勝田善助
- 『旅日記』大一冊 河洲編 竹巢月居序 平安書林橘栄堂勝田善助
文化四年
- 『花供養』半一冊 蒼虬編 沾雪序 勝田善助
- 『くさ摘』半一冊 車大編 京都橘栄堂勝田善助・桃林堂勝田喜右衛
門 錦小路上 桃林堂勝田喜右衛門
- 『花の兄』半一冊 眉山編 平安書林橘栄堂 勝田善助
- 『長月集』半一冊 威如斉序 俣世跋 勝田善助
- 『まつ月』半一冊 如阜編 器一序・五来跋 京都橘栄堂勝田善助
- 『心のしみつ』半一冊 古音編 桃甫序 麦宇跋 京 勝田善助
- 『発句金蘭集』中二冊 瑞馬編 自序 米彦序 野田治兵衛 勝田善
助
文化五年
- 『くさ摘』半一冊 車大編 京都橘栄堂勝田善助
- 『四季禽獸 生生物』中二冊 車大編 京都橘栄堂勝田善助
- 『春のもの』半一冊 眉山編 自跋 勝田善助
文化六年
- 『くさ摘』半一冊 車大編 京都橘栄堂勝田善助
- 『花供養』半一冊 蒼虬編 文常序 大無跋 勝田善助
- 『春のもの』半一冊 眉山編 山居序 勝田善助
- 『蓬萊讚』半一冊 晋万和編 京都勝田善助
- 『草神楽』半四冊 梅夫編 士郎序 京都勝田善助
文化七年
- 『ふた葉草集卯卷』小四冊 正風道場升六編 京都勝田善助
- 『霜月十三日』半一冊 青彦編 自跋 京都勝田善助
- 『春秋篇』半一冊 晋万和編 自序東埜跋 京都勝田善助

俳諧書林勝田善助の出版活動と俳人橘栄堂

Publisher of Haikai-Katsuta Zensuke's

Publication Activities and Hajin Kitsueido

大西紀夫

ONISHI Norio

はじめに

俳諧書林が出版活動のかたわら、余技として俳諧を嗜むことは、かなりあったようで、蕪村門下の橘仙堂こと平野屋善兵衛が、俳人橘仙として、諸俳書に句を寄せていることなどはその一例であろう。

この橘仙よりも少し後の文化年間に主に俳書を専門に出版した京都の書肆河内屋善助こと勝田善助も同じように、「橘栄」として自ら出版した俳書に句を載せている。俳諧の専門店であったこれらの書林が、俳諧師との付き合いのなかで、俳諧を嗜むようになるのはごく自然なことであつた。本稿では、京都の俳諧書林勝田善助の出版傾向と俳人であった橘栄堂について述べてみたい。

勝田善助の出版活動

勝田善助は、『万家人名録』（長斎編 文化一〇）には、「橘栄 勝田氏 号橘栄堂、俗称河内屋善助、蕉門俳諧書林、京都烏丸通下立売上住」とあり、『新選俳諧年表』（大西一外・平林鳳二）では、「橘栄、勝田氏、通称河内屋善助、橘栄堂と号す。俳諧書肆たり、京都人、文化年中」と記す。

また、『日本書誌学体系76 改訂増補 近世書林版元総覧』には、「河内屋善助 橘栄堂 勝田氏 京烏丸下立売 雁風呂（俳書）寛政6合 追善・華罌粟（日々庵浦やす等）天保※蕉門俳諧書林」と載っている。まず年毎の出版活動を見てみたい。

寛政六年

○『雁風呂』半一冊 呂蛤編 重厚序 平安書肆 橘仙堂・橘栄堂刊

寛政七年

○『俳諧秘書 いしずゑ抄』半二冊 為角著 京都橘栄堂善助

寛政九年

○『はいかい ももちとり』半一冊 一鳳編 自序 京都橘栄堂善助

寛政十年

○『俳諧 風雅屋』半一冊 閑空等編 滄浪居士序 橘栄堂善助

○『こそこのしほり』半一冊 斗醉編 亞溪序 京都橘栄堂善助

享和三年

○『花供養』半一冊 京都書林 烏丸通下立売ル町 勝田善助／御幸町

錦小路上ル町 勝田喜右衛門梓

おおいし のりお（経営情報学科）